

横浜市立大学がまとめた「新たな大学像について」案に同大学木原生物学研究所(白塚区舞岡町)の「実質的な廃止」(木原生研関係者)が盛り込まれ、困惑が広がっている。同研究所は多くの研究成果を挙げ、遺伝子バンクは国内トップ級だ。これらの行方については同大学評議員会でも指摘があり、懸念する声は高い。(松沢 雄二) 日本記一面に

どうなる研究成果 遺伝子バンク...

今回の案では、木原生研は木原記念横浜生命科学振興財団への移管を柱に、一部は医学研究科、総合理学研究科との再編で、移管は今後三〜六年の間とされている。

関係者が懸念するのは、受け皿とされる財団の受け入れ態勢と移管の時期、手法など。旧財団法人木原生物学研究所から受け継ぎ、増強してきた遺伝子バンクと研究能力。バンクはコムギでは日本でトップの保存を誇り、そのほかの動植物も国内有数。財団研究所から受け継いだ組織は拡充され、植物実験のための圃(ほ)場も舞岡リサーチパーク内に統合された。

これらを使って教授六人、助教授四人、助手五人を核に各研究グループが成果を競っているが、これまでさまざまな学会の学会賞三件、奨励賞四件を受賞している。世界的な自然科学学術誌「ネイチャー」への研究報告件数は日本の大学の中で二十三位の横浜市大分六件中三件が木原生研からのもの。さらにコムギ研究から、タンパク質研究へと学術分野の動向が移る中

で、木原生研の果たす役割は関係者から期待されている。これらは木原生研の各

市大の木原生研「実質廃止」 関係者に困惑広がる

研究チームの連携が支えたとはいえるだけに、今回の案には当惑を隠さない。

◆木原生研とは 横浜市立大学の付置研究所(学部、大学院と同等の組織)として1984年、発足。94年に舞岡リサーチパークに新研究所が完成。植物系3部門(遺伝進化学、細胞遺伝学、植物工芸学)、動物系3部門(細胞生物学、生物工

また、遺伝子を研究対象とし「封じ込め施設」を有する研究所としては珍しく、春の桜のシーズンなどに近隣の住民に所内の庭を開放したり、毎年夏には市内の高校生を対象に初歩的なバイオ実験講座を開設、一般の評判も高かった。

今回の案が木原生研内に報告されたのは、ごく最近で、検討の時間さえなかったとの不満もある。そのため、評議員会でも、「移管」の表現を削るなどの注文が出されたが、結局、学長、事務局長一任で決着しており、「実質的な廃止」を避けるかどうかは判断を許さない。

富崎香・木原生研所長の話。大学改革の必要性は認め、内部でもさまざまな案を検討してきた。今回の案には「移管」の具体策もなく木原生研内部でも困惑している。

学、生物化学)があり、生物的、物理的封じ込め研究設備、圃場などがある。前身は高等植物遺伝学、進化学の国際的権威の故、木原均博士の財団法人木原生物学研究所。82年に寄付申し入れを受け、横浜市が半ば誘致する形で引き受けた。

平 高 見 死 罪 敬 公 判 広